
聖劍物語

蒼乃迅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣物語

【Zマーク】

〔Z989〕

【作者名】

蒼乃迅

【あらすじ】

3人の若者が“勇者”を目指し、聖剣を手に入れ、世界を平和の為に立ち上がった物語。“魔法や魔物、色々な武器や戦争”。それらを3人の“別視点”から世界を見ていく、ゲームや漫画の中の勇者を描くのではなく、新たな“勇者”を描写しています。

【創章】

聖劍

それは

神によつて創造され

神によつて『えられ

神の力を使える

聖なる剣

その剣を手にした者は

武器として

最強の力を使い

国々を支配することができ

王になることができた。

古来

誰もが求め

誰もが探し

奪い合い

数々の争いが起きていた。

しかし

聖剣は

誰もが使えるものではない

神によって選ばれ

認められた者のみ

使えることができる。

つまり

勇者である。

勇者とは

誰よりも勇気があり

世界のために

身を投げ出す者

そして…

“人を愛していること”

それが勇者である。

『IJの物語は、聖剣と勇者達の世界を変えていったエピソードである。』

【第一説】1章「・進路・」

【第一説】
～第1章～

「・進路・」

遠い東方に位置するカナリア島。この世界では、一番小さな島で島人のほぼ8割が漁師であり毎朝、その島の特産品とも言える力ナリアフィッシュが水揚げされていた。

昔から、国々の争いや戦争の影響も受けることなく存在していた力ナリア島では、島人全員が顔見知りで共に助け合い共に生活していた家族みたいなところであった。

そんな平和な島には、かつて世界を救つたとされる勇者ゴルディンが生活した地とされゴルディンの第2の故郷でもあった。

今でも勇者ゴルディンが残した伝説が島に伝わっている。その島には、ゴルディンの息子である、この物語の主人公アルスが住んでいた。

アルスは、この島で生まれて十八年。

五歳の時から漁師たちと共に漁に行き、漁に明け暮れていた。泳ぎは、力ナリア島で一番の泳ぎ手で、水中の最大活動時間は、30分という巣潜りの名人でもあった。そしてその目は、透き通った水色で鷹の目のように数十キロメートル遙か彼方の水面を泳ぐ魚さえ見ることもできる。まさに、勇者である父の才能を海人ととして受け

継いだとも言える。

アルスは、18歳の誕生日の夜、長老の屋敷に呼ばれた。

「何かよひですか？長老…」

アルスは、聞く。

「まあ座りなさい。」長老は、アルスに座を差し出した。

「誕生日おめでとう。アルスよ…」

「ありがとう」それこます。」

長老は、アルスに祝いの言葉をあげると、眉間にシワをよせ真剣な眼差しでアルスに向いた。アルスも長老の真剣な眼差しにビックリして睡を飲み込んだ。

「どうしたんですか？」

「お前に一つ聞きたいことがあってな…」

「…？」

「お前の父親のことなんだが…」

「父のことですか？」

「お前が生まれてまもないときにはの島を去つて行つた…」

「はい…知つてます。よく母に聞かされてましたから…」

「何で旅立つたかは、分かるんだな？」

「はい。」

アルスは、生まれてから父の顔を知らずに18年間生きてきた。そして15歳の冬に母を病魔が襲つた。その病は、治すこともできぬい、不治の病でアルスは、必死に看病した。……が結果は、虚しく母は、息を引きとつた。

アルスは、心中で父を恨んだ。昔は、父と母は幸せに暮らしていた。しかし、幼いアルスと最愛の妻を残し、一人島を去つたことを。

「私は、まだ父を父親と認めた訳じゃありません。」

「…」

長老は、俯く。

「長老。そろそろ皆が外で待つてるので…」

アルスは、立ち上がり外に向かつた。

「アルスよ…」

長老が呼び止める。

「？」

長老は、古い引き出しから一通の手紙を取り出した。その手紙には、魔法の印が刻印されていてそれは、アルスにだけしか読むことのできない手紙であった。

「これは、お前の父からあずかった物だ。」

「父が…？」

長老は、アルスに手紙を手渡す。

「お前の父が、18の誕生日に渡してと預かったのだ。」

「…」

アルスは、手紙を見つめる。

「その手紙は、一人で見ると…どうやら、アルス一人で見たときに魔法の印が外れると思う。」

「分かりました…」

アルスは、手紙をしまうと外へと出ていった。

アルスの心中は、とても乱れていた。

それは、まるで戦争のようなものだつた。

今の自分と父親を探している自分が剣と剣を太刀向かせて、にらみ合ひを続けていた。

父親…

父さん…

いつたい…

…

「俺は、何を考えているんだ？」

アルスの誕生日会が終わってから会場である島集会場で一人ポツン

と考え」んでいた。

アルスは、考えていてもしょうがないと思い、しまつていた手紙を取り出した。

「どうやって開けるんだ?」

すると、手紙に刻印されていた魔法の印が光出してゆつくりと消えていった。すると、手紙が開き中身から紙でできた小鳥が出できたのである。

「うわーーー?」

アルスは、ビッククリして手紙を離した。

その小鳥は、語り出した。

「我が息子アルス…」

父さんの声だ。とアルスは分かった。

「お前が、この手紙を読んでる頃は、もう一歳になつてることだと思う。お前の母さんのことも気がかりだ。幼いお前を残して、また戦地に向かわねばならないからな…。アルス…お前には、私と同じ道を歩んで欲しくはない…。この平和なカナリア島で平凡に暮らすのがいいと思う。だから、母さんの故郷であるカナリア島を選んだ。戦火の火が届かない所を…。最後に、今のお前の姿を見たかつたよ。」

すると、語り出した小鳥は、跡形もなく燃えていった。

その日からアルスは、考えるよつになつた。

そんなんある晴れた日の午後。

親友のケインと島の秘密の遊泳所で泳いでいた。

いつもなら一人で泳いでいたがその日はアルスだけが岩場に腰かけて遠い水平線を眺めていた。

「どうした？」

ケインが不思議そうに聞いた。

アルスは、その問いかけにただ俯いただけだった。

その日の夜：

アルスは、ケインの家にいた。アルスは、ケインに手紙の事を話した。

「お前は、どうしたいんだ？」

「…」

アルスは、その問いかけに下を向いたままだった。

そんなアルスの姿を見てケインは、苛立ちを隠せないでいた。
アルスの父親の事は、伝説となつて伝わつていたが、アルス自身は、
他人事のように思つていた。

父親の存在：

ただそれだけがアルスの頭から切り離せない。

“唯一の肉親”、“置いて行かれた過去”、“怒り”、この3つが

鎮となっていた。

俺は、どうすればいいんだろ？
父親の後を追うべきか…。

どういう奴なのか…。

次第にアルスは、父親について知りたくなってきた。

「お前のしたいようにやればいいんじゃないかな？」
ケインが言つ。

「やうなのかな…」

アルスが聞き返す。

「俺は、親父がいたから親父のような漁師になりたい夢ができた！
だけど、今のお前には、夢がない。」

「夢…」

俺の夢…

漁師…

違う…

親父のよくな…

勇者…

五歳の時、アルスは、母親から父さんのことを良く聞かされていた。実は、母さんは、元魔導師で父ゴルディンと世界復興の戦いに共に戦つたことを話していた。当時は、母さんも一族の魔導師であつたため父さんの旅に参加するのを拒んでいた。一族の強い捷があつたからだ。しかし、それを壊したのが父さんで仲間に入れたと言つていた。そんな理屈も覆すような人だつた。

父さんは、誰が見ても勇者だと言つていた。それは、誰よりも強い意思と勇気、どんな強い敵にも立ち向かつて行く根性を兼ね備えたからだと。そして仲間を一番大切にすることを。

暫く黙つていたアルスの心境は、勇者という者に傾き始めていた。そして父親に会いたいと。

明け方、アルスは長老の屋敷に行つた。
この心境を知らせる為だった。

「やはり、父親と同じ道を行くのだな。」

「はい…」

「どうしてもか？」

「俺なんかが島に居てもつまらない人間で終わると思います。だから、島を出て世界をこの目で見てみたいのです！」

「まさか、母親と同じ事を言いつとはな…」

長老は、今のアルスの姿と共に旅立つたアルスの母親ロゼリアの姿を重ねて思い出していた。

「当の昔に一族の捷は、無くなつた。誰もお前の旅路を邪魔するものはない。」

「じゃあ、お許しに？」

アルスが聞く。

「ああーお前の好きなようにしなさいーしかし、必ず戻つてくるのだぞー！」

「はーー。」

「出立は、いつじゃ？」「明け方に」

明け方、アルスは出立の準備をしているとケインが走つてやって來た。

「黙つていいくつもりか？」

アルスは、振り向く。

「『』めん… 親友のお前に一言言つべきだつたか。」

共に今まで過ぐしてきた日々の中でケインは、本当の親友であり、この友情が宝物だつた。

「怒つてるか？」

アルスは、尋ねる。

「怒つてるか？何を言つてるんだ？」

「？」

「誕生日の日から薄々感じていたさー。アルスが、この島から出でいくことを。」

「お前には、いつも迷惑をかけるな…」

「いいんだよ！親友の旅だちを止める奴がどこにいる！俺は、応援してるよ。」

アルスは、涙ぐむ。

ケインとアルスは、浜辺に留めてある小舟へと向かう。

向かう途中では、『これまでの島の思い出やケンカの事を笑いながら二人は、思い出していた。

浜辺に着くとアルスは、小舟の中に荷物を入れて、小舟を海へと移動させた。

しかし、なかなか小舟を移動できない。

後ろからケインが押してくれた。

「すまない。」

そこにケインが言った。

「……お前が手伝いなんかするのは、暫くないんだな。」

その言葉にアルスは、涙ぐむ。

「……うん。」

アルスは、涙を隠そと水平線に浮かんでくる朝日を眺めた。

小舟を海に浮かべるとアルスは、舟に乗り込んだ。

そこでもアルスは、ケインの方を見ることはなかった。

「……見送りは、ここまでだ。海に出たら、うちの母さんが作ったオニギリを食つてくれ。」

「……ありがと。」

ゆっくりと小舟を海へと出す。

数メートル離れた所で声が聞こえた。

「アルス！――これを――」

ケインが何かをアルスに向かつて投げてよこした。

アルスは、とつさに振り向いて右手で掘んだ。

それは、ケインが大事にしていた結晶石だった。

「お前！これ！」

「いいんだよ！俺が一緒に行けない代わりに俺の大切な物がアルスの旅に共に行ってくれる。その石を俺だと思ってくれ――！」

「……ううん」

アルスは、涙を溢す。

「なに泣いてんだよ――」これから、勇者になろうってやつが――

「お前だつて――」

見ると、ケインも大量の涙が目から溢れていた。

二人の間に小さな間が開くとお互い親指を立てて、グーポーズをした。

浜辺に目をやると、長老と島人全員がいた。

「頑張れ～～～！――アルス～～～！――」

「ありがとう――――みんなあ――――」

そして、ケインが最後に言った。

「世界を見てこい…」

アルスは、島が見えなくなるまで舟の上から手を振り続けていた。舟は、西へと向かう。

この時アルスは、思わなかつた。

これから、自分自身に起こる壮絶な出来事達に。

アルス 18歳の旅立ち…

次章に続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7989j/>

聖剣物語

2010年10月12日00時53分発行